

重病でも口をきれいに

ちょっと 元気に

耳かきでさえ、綿毛の部分にまたるものが多い。

歯ブラシ用の毛を針金に植えて、球状にした「ハ

るリーナブラシ」を、著者の黒岩恭子さんはこう表現する。神奈川県茅ヶ崎市で開業して28年になる歯科医である。

高齢者や障害者の口の中はたまりがちな食べかすやネバネバをかき出す道具だ。どこに当たっても痛くないのが綿毛の優み。

柄の部分も針金なので柔らかくはならず、口内を傷める心配がほとんどない。

茅ヶ崎徳洲会総合病院では、手術の直後や意識のないう患者にこれを使う。口の清潔さが肺炎の予防に直結するからだ。

内山下三子看護師長は「以前は大きめの綿棒を使っていましたが、時間がかかるわりにきれいにならない。このブラシだとシヤカシヤカシヤカで終わる。その刺激が意識の回復も早めるようです」という。島根県の松江市立病院は昨秋から入院患者に、このリーナブラシを買ってもらっている。市販品は470円だ。

言い出したのは言語聴覚士の竹内茂伸さんだ。話せなくなった人の言葉を取り戻すのが専門である。のこの機能訓練という立場から、ものを飲み込みにくくなった人が食べられるよう手助けもしている。

1年前、口をきれいにする良い方法はないかと医師から相談されたとき、「口の「リハビリ」の講演で感銘を受けた黒岩さんのことが思い浮かんだ。病院に招き、手本を見せてもらった。評判は上々で、このブラシを病院全体で使うことになった。

今、ほとんどの病院で口内は放っておかれない。「病院は無菌医療なんです」と、藤田保健衛生大学医学部リハビリテーション医学講座の才藤栄一教授はいう。教授の研究グループがリハビリ病棟の入

院患者151人を調べたところ、9割以上に歯の治療が必要だった。ところが、大半が何も訴えていなかった。訴えることもできなかったのだろう。医師は口内に関心がなく、歯科医は院内にいない。

「最近の研究で、歯の治療をすると生活の自立度が上がるという結果も出た。口の中がきれいになって、ご飯が食べられるようになれば元気になる。その常識的なことが、病院ではできていないのです」

障害を持っていても病気になることも、ずっと口から食べてほしい。そう願って、黒岩さんは一人ひとりに合わせているような道具やリハビリの手法を工夫してきた。

なかでも、10年ほど前に考案した、このリーナは自信作だ。「口臭がなくなった」「食べっぺりがなくなった」といった声をよく聞く。ほとんどの意識がなかった28歳の青年は、両親から毎日、このブラシによる口のそとじをしてもいいと聞いて、周りの声に反応するようになった。

高齢者施設から療養型病院へ。さらには一般の病院へ。小さな道具が少しずつ医療の谷間を渡している。